

RETAILER ACADEMY NEWS

Apr 2024 | Bentley Motors Japan

無限の可能性が広がるビスポークの世界 続々と発表されるマリナーの新作



ベントレー モーターズの2023年は過去2番目の好業績を記録しましたが、売上高を押し上げる要因の1つとなったのが、拡大するパーソナライゼーション需要にマリナーが対応したことでした。今年2月には、日本市場限定のベンティガ Azure Nimbus コレクションを発売しましたが、世界各地でマリナーが手掛ける限定車やビスポークのベントレーが誕生しています。そこで今回は、パーソナライゼーションのヒントとして日本未導入の限定モデルなどをご紹介します。

ペニンシュラ ロンドンに ビスポークのベンティガ

ベントレー モーターズは1月、ラグジュアリーホテルとして知られるペニンシュラ ロンドンの宿泊客の送迎用車両として、ビスポークのベンティガ ハイブリッドを納入しました。

ベース車両はベンティガ Azure ハイブリッド。ボディカラーは特注のペニンシュラグリーンで、ルーフレールやクロームパーツも同色で仕上げられています。インテリアはサドル×ベルーガのデュオトーンで、ウッドパネルにはウォルナットが採用されています。

ペニンシュラホテルズでは従来から他ブランドのリムジンを使用してきたため、マリナーの技術力の高さに加え、ベントレーが選ばれたという点でも注目を集めました。



Private White V.C.仕様の 限定版ベンティガ

英国・マンチェスターで200年以上の歴史を誇るアパレルブランド「Private White V.C.」。両ブランドが象徴する英国の伝統やハンドメイドのクラフツマンシップ、ラグジュアリーファッションを忠実に表現したうえで、Private White V.C.をイメージした特別仕様のベンティガが誕生しました。Private White V.C.は、創業者が第一次世界大戦で銅製の電話線を体に巻き付けて将兵らを救出したという戦功により、ヴィクトリア十字章を受章したことに由来します。特別仕様のベンティガ Azureは、シートのパイピングや刺繍などキャビン全

体に銅色のディテールを多用しています。



マリナー初、インド市場限定車の GT、フライングスパー、ベンティガ EWB

マリナーがコンチネンタルGT Speed、フライングスパー Speed、ベンティガ EWB Azureのインド市場限定車を製作しました。マリナーがインド市場限定車を手掛けるのは初めて。ボディカラーはスカラベグリーンで、インテリアにはインドのナショナルカラーをイメージさせるマンダリン×カンプリアングリーンで仕上げました。カンプリアングリーンで仕上げられたピアノヴェニアのフェイスパネルには、野生の馬と山のモチーフがクロームオーバーレイで描かれています。



国際女性デーを記念して 3種類のベンティガを製作

国際女性デーを記念し、マリナーが3台のベンティガを製作しました。4 1/2リッターを駆って24時間で2,164マイル走破・平均時速89マ

イルという記録を打ち立てたメアリー・ブルース、プロワーの開発に貢献しレースを愛したドロシー・バジェット、第二次大戦時に完成した航空機を工場から基地まで輸送する任務を遂行したダイアナ・パーナートら、「ベントレー ガールズ」の功績をあらためて称えるもので、デザインはベントレーの2人の女性デザイナーらが担当しました。ベンティガはそれぞれのベントレー ガールズの愛車のモチーフを散りばめながら手作業で仕上げられています。



自然界の花をイメージした ベンティガ用スタイリングパッケージ

ヨーロッパのみで導入されるカラフルで刺激的なベンティガ S用の「キュレーテッド by マリナー」スタイリングパッケージが登場しました。テーマは自然界のそれぞれの色合いからインスピレーションを得た「マゼンタ」「グレースーパーブルー」「アジマスブルー」「チェリーブロッサム」の4種類です。このうち「チェリーブロッサム」は、日本の桜をイメージしてデザインされています。



COMPETITOR INFORMATION



電動化により進化を遂げたオフローダー メルセデス・ベンツ Gクラス

メルセデス・ベンツは、2024年3月26日に同社の人気オフロードモデル「Gクラス」の新型モデルを発表しました。
基本的な内外装デザインは現行型を踏襲していて、旧型との差異は極めて少ないのが特徴です。

SUMMARY

- ラインアップは、ディーゼルエンジンのG 450 d、ガソリンエンジンのG 500およびメルセデスAMG G 63の3種類
- 3種類用意されるエンジンすべてに48V電気システムとマイルドハイブリッドを搭載
- インフォテインメントシステムを最新世代の「MBUX」に刷新。新たに対話形式の音声認識操作に対応
- Gクラス専用の内外装カスタマイズプログラム「MANUFAKTUR」のラインアップを拡充
- 安全運転支援システムとして、アクティブステアリングアシスト、アクティブエマージェンシーストップアシスト、ルートに対応した速度調整機能をGクラスとして初装備



INTERIOR

- キーレスゴーを新たに採用。他のメルセデス各車と同様に、キーのリモコン操作をすることなく車両の解錠/施錠が可能
- インフォテインメントシステムの変更により、センターコンソールのコントローラーを廃止。新たにタッチパッド、ワイヤレス充電ングなどを装備
- 車両の傾斜角や路面の勾配などをコックピットディスプレイとメディアディスプレイに表示する「オフロードスクリーン」を採用
- 360°カメラによりフロント下部の路面の映像をメディアディスプレイに仮想的に表示する「トランスペアレントボンネット」機能を採用
- 新世代のタッチコントロール式ステアリングを採用。また、ダッシュボード中央にオフロード系操作スイッチを集約



EXTERIOR

- フロントグリルの水平バーは従来の3本から4本に変更
- フロントバンパーとリアバンパーがより力強いデザインに変更
- Aピラーのモールとルーフのスポイラーリップにより空力性能および音響的な快適性を向上
- バックカメラは従来のテールゲート下部からバンパー中央に移動。新たにウォッシャー機能も装備
- 「AMGライン」「PROFESSIONALライン」「EXCLUSIVEライン」のオプションパッケージを用意



PRICE

未定

TECHNOLOGY

- G 450 dには3.0リッター 直6ディーゼルエンジンを搭載。最高出力は367 ps、最大トルクは750 Nm
- G 500には新開発の3.0リッター 直6エンジンを搭載。エグゾーストガスターボチャージャーと電動スーパーチャージャーにより最高出力449 ps、最大トルク560 Nmを発生
- メルセデスAMG G 63には48V電気システム+ISGを組み合わせた4.0リッター V8ツインターボエンジンを搭載。最高出力は585 ps、最大トルクは850 Nm。
- メルセデスAMG G 63の0-100 km/h加速は4.4秒。最高速度は220 km/h。AMGパフォーマンスパッケージ装備車は0-100km/h加速4.3秒。最高速度240 km/h
- メルセデスAMG G 63のオフロードパッケージPRO装備車両には、新たに「Sand」「Rock」のオフロード走行プログラムを追加



COMPETITOR INFORMATION

一部改良 発表：2024年3月14日 / デリバリー：未定

日産 GT-R 2025年モデル



vs Continental GT

- 青を基調とした専用特別内装色「ブルーヘブン」をNISSAN GT-R Premium editionに新設定
- NISSAN GT-R Premium edition T-spec と NISSAN GT-R Track edition engineered by NISMO T-spec のピストンリング、コンロッド、クランクシャフトなどに高精度重量バランス部品を採用
- 上記2モデルのエンジンルームに、匠の名を刻んだアルミ製ネームプレートとゴールドのモデルナンバープレートを貼付

車両価格 (税込)	主なグレード	
	GT-R Pure edition：	14,443,000円
	GT-R Premium edition T-spec：	20,350,000円
	GT-R Track edition engineered by NISMO T-spec：	22,891,000円
	GT-R NISMO special edition：	30,613,000円

特別仕様車 発表：2024年2月28日 / デリバリー：2024年3月以降

メルセデスAMG G 63 Grand Edition



vs Bentleyga

- マグノナイトブラック（マット）のボディカラーに、マグノカラハリゴールドアクセントをエクステリアの各部に施した専用エクステリアを採用
- テックゴールドペイントの22インチAMGアルミホイールを特別装備。ライト類はブラックスモーク仕様
- インテリアでは、特別仕様車専用のAMGパフォーマンス ステアリング、ゴールドステッチ入りのナッパレザーシートなどを採用

車両価格 (税込)	メルセデスAMG G 63 Grand Edition：	32,000,000円
--------------	------------------------------	-------------

ニューモデル 予約受注開始：2024年3月27日 / デリバリー：未定

ポルシェ パナメーラ



vs Flying Spur

- 2023年11月に予約受注を開始したパナメーラ、パナメーラ4に続き、PHEVのパナメーラターボ E-ハイブリッド、パナメーラ4S E-ハイブリッド、パナメーラ4 E-ハイブリッドの予約受注を開始
- PHEVモデルはパワーアップと充電時間の短縮を実現
- パナメーラターボ E-ハイブリッドでは最大93 kmの電気走行が可能

車両価格 (税込)	主なグレード	
	パナメーラ4 E-ハイブリッド：	16,690,000円
	パナメーラ4S E-ハイブリッド：	19,400,000円
	パナメーラターボ E-ハイブリッド：	29,540,000円

ニューモデル 発売：2024年2月15日 / デリバリー：未定

メルセデスAMG GLC 63 S E PERFORMANCE



vs Bentleyga

- ミドルクラスSUVの「GLC」に追加されたPHEVのハイパフォーマンスモデル
- フロントには2.0L 4気筒ターボエンジン、リアアクスルには150kWの交流同期モーターを搭載。システム出力 500kW (680ps)、最大システムトルク 1,020Nm を発生し、0-100km/h加速は3.5秒
- AMG ハイパフォーマンスバッテリーは、直接冷却方式を採用したバッテリーセルにより、バッテリーが高温となる高負荷時に対応

車両価格 (税込)	メルセデスAMG GLC 63 S E PERFORMANCE：	17,800,000円
--------------	----------------------------------	-------------

特別仕様車 発売：2024年3月12日 / デリバリー：未定

シボレー コルベット EDITION CERV I/ HERITAGE EDITION



vs Continental GT

- 幻のミッドシップ試作マシン「CERV I」をモチーフにしたコルベット EDITION CERV Iは、シルバーフレアメタリックのボディカラーとエッジブルーのストライプを採用
- コルベット HERITAGE EDITIONは、全車に真つ赤なレザーインテリアを採用した初代モデルのオマージュとして、レッドのフルレザー内装と日本初採用のシーウルフグレートライコートのボディカラーを採用

車両価格 (税込)	シボレー コルベット EDITION CERV I：	15,100,000円(クーペ2LT)/18,900,000円(コンバーチブル)
	シボレー コルベット HERITAGE EDITION：	17,400,000円(クーペ3LT)/18,900,000円(コンバーチブル)

特別仕様車 受注開始：2024年3月25日 / デリバリー：未定

RANGE ROVER SPORT SATIN EDITION



vs Bentleyga

- RANGE ROVER SPORT AUTOBIOGRAPHY D300をベースに、内外装をダークトーンで統一した限定35台の特別仕様車
- シャラントグレイの外装色に、優れた耐久性のサテンプロテクティブフィルムを施すことで滑らかな質感のボディを表現
- さらにブラックのエクステリアパックとコントラストルーフ、ダークグレイの23インチホイール、エボニーインテリアにより、全身をダークカラーで統一。プレーキキャリパーにはレッドのアクセントカラーを採用

車両価格 (税込)	RANGE ROVER SPORT SATIN EDITION：	18,985,000円
--------------	----------------------------------	-------------

PRODUCTS



バトウールに光の彫刻を デジタルパーソナライゼーションの 第一歩

ベントレー モーターズのパーソナライゼーション部門であるマリナーはこのほど、手作業で仕上げるコーチビルドモデルのバトウールに、ドアから地面に投影されるウェルカム アニメーション シークエンスを提供する新技術を公開しました。

この光の彫刻とも呼べるパーソナライゼーションに用いられている技術は「デジタル ライト プロセッシング (DLP)」と呼ばれるもので、先進的なヘッドライトやヘッドアップディスプレイのシステムで活用されてきました。このDLP技術の特注のウェルカムアニメーションに使用した初の自動車用アプリケーションとなります。これを可能

にするプロジェクションシステムは、3色の光源を5つの異なるレンズと2つのプリズムを通し、最先端の8 mmのデジタル マイクロ ミラー デバイス (DMD™) に投影。その後、光信号は5つのレンズを通して焦点を合わせ、ドアを開くとアニメーションが投影されるという仕組みです。DMD™は415,800個もの小さなミラーで構成された小さなシリコンチップです。ミラー自体はアルミニウム製で、幅は16ミクロン。ミラーとヒンジのサイズが非常に小さく、1秒間に何千回も反応でき、それぞれのミラーがアニメーションの1ピクセルを構成します。これらのミラーの動きによって投影される光が動画となって生成されるのです。

ベントレーのデザイン言語において次のステップとして有望視されている要素の1つである光の彫刻は、2019年に発表したコンセプトカー「EXP 100 GT」に採用されて世界に向けて公開（写真右下）されました。EXP 100 GTのフロントグリルはイルミネーションで彩られていましたが、まさにこのコンセプトが用いられていたのです。

マリナーは今後、お客様が自分の車にマッチした色彩の特注アニメーションを制作できるようにするための準備を進めていきます。



アースデイ2024 ベントレーの環境対策

毎年4月22日は、地球の環境保護への支援や私たちができることなどを考えるきっかけとする「アースデイ」です。そこで今回は、ベントレー モーターズがBeyond 100戦略に基づいて推進する環境対策について、特に直近の1年間で行ってきた取り組みをご紹介します。リテーラーの皆様にもさまざまな形でご協力いただいておりますが、アースデイを機にあらためて地球環境を守るためにできることを考えてみてください

ベントレーの環境に対する考え方

ベントレー モーターズは現在、世界で最もサステナブルなラグジュアリー モビリティ カンパニーになることを目指し、Beyond 100戦略に基づいてさまざまな環境対策に取り組んでいます。

しかし、ベントレーの環境保護の取り組みは今に始まったことではありません。一例を挙げると、かつてウッドパネル用の木材を調達するために木を1本伐採したら、同じ種類の苗木を10本植樹していました。現在ではさらに持続可能性に配慮した方法を確立して木材を調達しているほか、木材に代わるラグジュアリーな素材の開発と商品化も積極的に推進しています。



クルーの太陽光発電10周年

英国・クルーにある本社では、初めて太陽光発電のためのソーラーパネルを設置してから2023年で10周年を迎えました。昨年には新たに次世代型ソーラーパネルが設置され、パネルの総数は36,418枚へと増加しました。増設されたパネルは従来型よりも発電効率に優れており、クルー全体の発電量としては2メガワット増加して10メガワットとなりました。これにより、CO2排出量を年間407,477トン削減できることになりました。



プラスチック廃棄物排出ゼロ認定を2年連続で取得

気候変動対策を手掛けるサウスポール社によるNet Zero Plastic to Nature（プラスチック廃棄物排出ゼロ）の認定を取得しました。ベントレーがこの認定を取得するのは2年連続で、製造業務から最終消費まで、ベントレーが意欲的に環境対策へのコミットメントに継続的に取り組んでいることが評価されました。



BEV生産に向け新施設に大規模投資

2023年3月にベントレーが発表したのは、クルー本社の敷地内に新しいローンチ クオリティ センターとエンジニアリング テクニカル センターの建設でした。ローンチ クオリティ センターの2階には、将来の素材をテストするラボと、将来のBEVの組み立てをテストするためのミニ組立ラインがあり、事実上の製造試験施設となります。エンジニアリング テクニカル センターでは、プロトタイプワークショップやソフトウェア インテグレーション センターなどが配置されます。いずれもBEVの生産に向けた準備の一環であり、Beyond 100戦略に盛り込まれている「ドリームファクトリー」構想の実現にまた一歩近づきました。



ベントレー環境財団を設立

ベントレー環境財団が設立されたのも2023年の大きなトピックの1つでした。ベントレーは、環境分野において時代に即した資金提供を実現する独創的かつ革新的な方策を開発。7月の財団設立とともに、先進的な取り組みで世界的な環境問題の解決を目指す3つの団体への支援を発表。10月には新たに2団体への支援を発表するなど、この分野での取り組みを活発化させています。



フライング ビーのプレミアムハニーを収穫

クルーが含まれるチェシャー地方の生物多様性の確保とセイヨウミツバチの保護を目的としたプロジェクト「フライング ビー (Flying Bee)」が2023年も実施され、クルー本社敷地内に設置されたハチミツ生産のエクセレンスセンターでは多くのハチミツを収穫できました。昨年は最も古い2つの巣箱からブラックエディションラベルの「プレミアムハニー」を収穫。ブラックエディションは瓶詰めで500個が、その他の巣箱からも1000個ものハチミツが収穫できました。



進む販売店網のカーボンニュートラル化

ベントレー モーターズは2030年までにエンドツーエンドでのカーボンニュートラルの達成を目指しています。昨年は米国の販売店全店舗でカーボンニュートラル認証を取得するという大きな動きがありました。

日本のリテーラーの皆様にもカーボンフットプリントの測定やCO2削減計画の策定・実行など、さまざまな取り組みを行っていただくようお願いしてまいりました。今後もカーボンニュートラルの達成に向けてご協力ください。



次世代バイオ燃料タンクをクルーに設置

クルー工場に新たに設置されたのが、薬を原料として作られる第2世代のバイオ燃料のタンクです。EN228規格に適合するこの燃料は、車両に無改造で使用可能。100年以上前のEXP 2でも使用できる優れた燃料で、2023年7月に開催されたグッドウッド フェスティバル オブ スピードでも、この燃料を使用したベントレーが好タイムを連発しました。今後はベントレーの広報車やヘリテージコレクションの車両に使われることになり、通常ガソリンを使用した場合と比較すると、ウェル・トゥ・ホイールでCO2排出量を85%削減することができます。



クルーの緊急時対応車両にBEVを導入

クルー敷地内での緊急時に出勤するファースト レスポンス チームの車両として、初めて2台のBEVを導入しました。これらの車両は、クルー本社に設置されたソーラーパネルで発電された電気、施設内107カ所の充電ポイントで充電することができます。



100年を超えるベントレー モーターズの歴史の中では、数々の名車が誕生し、世界中のお客様やファンに愛されてきました。ベントレーは現在、電動化への歩みを加速させて新時代の扉を開けようとしています。このブランドを作り上げてきた往年の名車をあらためてご紹介します。今回はR-Type コンチネンタルです。

R-Type コンチネンタルが誕生したのは1952年。この当時、最高速度が時速115マイル（約184km/h）に達する車は皆無に等しく、ましてや大人4人と荷物を乗せて時速100マイル（約160km/h）で巡航できる車など前代未聞でした。

当時は自動車メーカーがシャシーとエンジンを製造し、ボディは「コーチビルダー」と呼ばれる専門業者が手掛けるのが一般的でした。R-Type コンチネンタルは1952年～1955年の間に208台が製造されましたが、最も多くのボディ製造を手掛けたのが「H.J.マリナー」でした（193台）。そのためこの車を「マリナーの最高傑作」と評価する声も少なくありません。ちなみにベントレー本社のヘリテージコレクションとして大切に保管されているR-Type コンチネンタルは、1953年にH.J.マリナーが製造したもの（車体番号：JAS949）です。

JAS949には、最高出力155 PS/4,000 rpmを発生させる総排気量4,566ccの直列6気筒エンジンが搭載されています。フロントサスペ



ンションにはウィッシュボーン型サスアームとコイルスプリングが採用され、当時のメディアに「このベントレーは現代の魔法のじゅうたんだ」と言わしめたほど、優れた乗り心地を提供しました。

デザインの特徴は、フロントフェンダーから立ち上がりドアを貫いてリアへと流れていく「パワーライン」、筋肉質なリアフェンダーを演出する「リアハUNCH」、リアエンドへとなだらかに傾斜する「ルーフライン」です。2003年にデビューした初代コンチネンタルGT（詳細はNo.147・2024年2月号を参照）は、この3要素を受け継いでいます。「ベントレーのデザイナーがスケッチを書き起こす際には、最初にこの3本の線を描くところから始める」と言われるほど、現代のベントレーにとって重要なアイコンの源泉となったのがR-Type コンチネンタルだったのです。誕生から70年以上が経過した伝説の名車ですが、こ

のモデルに込められた精神は、今なおベントレーの中に生き続けています。



BEYOND 100



ベントレー モーターズが2020年11月に発表した中長期経営計画ともいえる「Beyond 100」戦略。創業100周年を迎えた翌年に発表されたこの戦略がどんな内容なのかをあらためてご紹介します。今回は「ファイブ・イン・ファイブ計画」についてです。



Beyond 100 戦略の中核となる項目が、「2026年までに全ラインアップをPHEVとBEVのみとする」と「2030年までに全ラインアップをBEVのみとする」の2つです。この2つを実現することは、大排気量のエンジンを搭載したラグジュアリーカーを製造してきたベントレーにとって、まさにコペルニクスの転回と言っても過言ではありません。そこで打ち出されたのが「ファイブ・イン・ファイブ計画」です。

この計画は、2025年から5年間は、毎年BEVの新モデルを発表するというものです。どんなBEVなのかは現時点では発表されておらず、ベントレー モーターズ ジャパンでもその詳細は把握していません。お客様からお問い合わせがあった場合は「英国本社からまだ何も発表されていません」と回答くださいますようお願いいたします。

ベントレーはBeyond 100 戦略の発表前から、つまり世界的に自動車の電動化に舵が切られる以前から、電動化への研究・開発に取り組んでいました。具体的な形として最初に発表したのが、2014年4月の北京モーターショーでの「ミュルザンヌ ハイブリッド コンセプト」

でした。2017年3月のジュネーブモーターショーではオープントップのEVである「EXP 12 Speed 6 e」を発表。2018年5月には、初代ペンティガ ハイブリッドを発売（日本未導入）し、2019年に創業から100周年を迎えたタイミングで、電動化の未来や2035年のラグジュアリー モビリティをコンセプトとした「EXP 100 GT」を公開しました。2020年12月には現行モデルのペンティガ ハイブリッドを発表（日本での発表は2021年11月）し、2021年7月にはフライングスパー ハイブリッドを世に送り出しています。



WLTCモードの内容

クルマの燃費を表示するときに現在、使っているのが「WLTCモード」です。
これは、いったいどういう経緯で生まれ、そしてどのような内容なのかを紹介します。

燃料消費率※¹（国土交通省審査値）

WLTCモード

20.4 km/L

市街地モード※²：15.2km/L

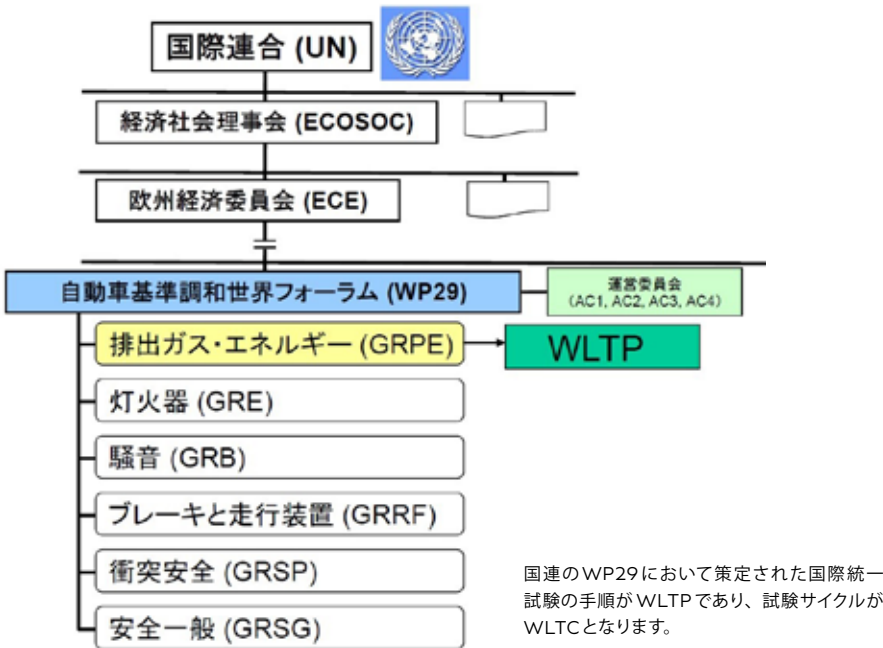
郊外モード※²：21.4km/L

高速道路モード※²：23.2km/L

日本限定から国際基準へ

もともと日本では、クルマの燃費を独自の方法で測定していました。それが過去の「10モード」燃費であり、「10・15モード」、そして「JC08モード」燃費でした。同様に世界各国では、それぞれの燃費測定方法が実施されていました。しかし、それでは世界各国に自動車販売する自動車メーカーは、それぞれの国の測定方法に対応する必要があります。その手間を省くために、国際連合（UN）の自動車基準調和世界フォーラム（WP29）において、世界統一の試験方法（WLTP：Worldwide harmonized Light duty driving Test Procedure）が検討・採用されました。そして、具体的な試験サイクル（WLTC：Worldwide harmonized Light duty driving Test Cycle）が定められたのです。

日本において「JC08モード」に代わって「WLTCモード燃費」が導入されたのは2017年夏からとなります。この後、WLTCモード燃費が算定された車種から燃費表示が切り替わりました。また、当初は表示義務のなかった燃料電池自動車（FCEV）に関しても2020年より燃費が表示されることになりました。使われるのは「km/kg」です。また、同じタイミングで電気自動車（BEV）の燃費表示も「JC08」から「WLTC」となっています。



走行抵抗を測ってからシャシダイナモへ

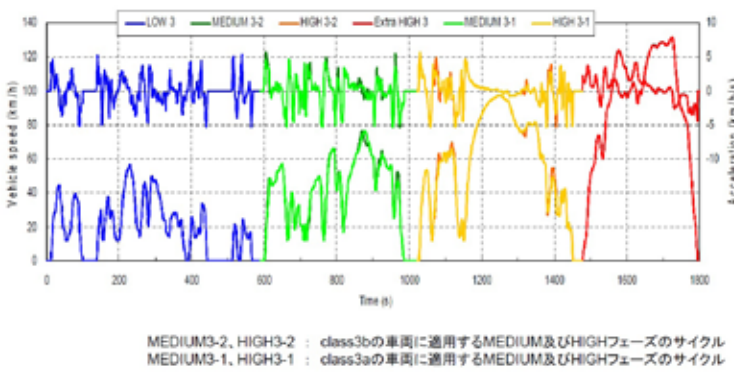
実際の試験は、すべてのクルマを平等に測定するため、シャシダイナモが使用されます。ただし、その前に野外のテストコースを走行して、空気抵抗とタイヤの転がり抵抗を実測。その数値と同じ負荷を設定して、シャシダイナモにて測定されます。測定は23度±3度の室内で6～36時間放置した後に、定められた走行モード（WLTCモード）にて測定します。



実走で測定した抵抗値をシャシダイナモに設定して、走行モードを使って燃費を測定します。

WLTCモードの特徴

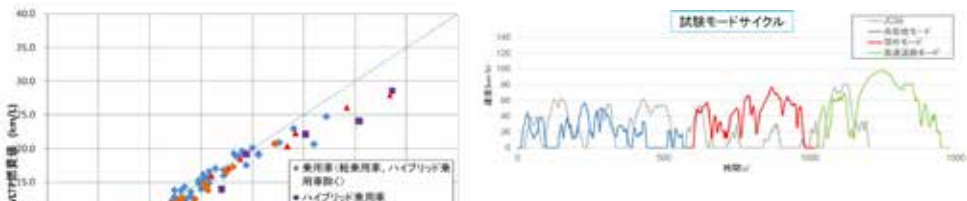
燃費をシャシダイナモにて測定するときに使うのがWLTCモードです。国際基準としては「ロー（市街地）」「ミディアム（郊外）」「ハイ（高速道路）」「エクストラハイ」が用意されています。ただし、WLTCモードは、日本／アメリカ／欧州／インド／韓国の5地域で定められたため、「エクストラハイ」は、非常に高い速度域となりました。そのため、「エクストラハイ」はオプション扱いとなり、日本では使用していません。



世界5地域で使うため、日本では使わない高い速度域の「エクストラハイ」も存在します。

JC08モードとWLTCモードの違い

JC08モードからWLTCモードに燃費表示が変わったことで、実際の表示の数値は悪化することが多いようです。その理由はルールの違いにより、「車両の重量が増加する」「コールドスタート割合が25%から100%に」「高速・高加速度の使用頻度増加」となったのが悪化の理由とされています。



より高速域を使う「WLTCモード」の方が「JC08モード」よりも燃費が悪化気味になる。

WLTCが示す内容

WLTC方式の燃費表示では、4種類の燃費性能が表示されています。それが以下のものとなります。

モード	内容
WLTCモード	市街地／郊外／高速道路の各走行モードを平均的な使用時間配分で構成したもの
市街地モード	信号や渋滞などの影響を受ける、比較的到低速な走行を想定
郊外モード	信号や渋滞などの影響をあまり受けない走行を想定
高速道路モード	高速道路などでの走行を想定